

裕村春輔編輯

西南
報聞
春延鶴の補

初編

東京弘書堂藏版

春の帯初編序

四隅静謐海波穩しやうせいのしやうせいのうたゆき五風十雨ごふうじゅうう

時を差へときをさへ由聖代ゆせいだい千萬民せんまんみんを救腹をきうはら撃げき

壤らう一いち文運ぶんうん乃の風小橋かぜのこはしの蘭化らんげの流ながるる

沐浴みよく一いち高枕安臥かうちんあんゐの時とき小陰せういん一いち豈あや

圓まんまや西南せいなん地方ちほう小殺氣せうさきの妖よう雲うん

暖あたた鏈い一いち線せんの電報でんぱう三千五百

谷村素輔編輯

西南 春延 雁前 補 初



春の 雁の 跡の 序

四隅 静謐 濛濛 海波 穩中 五風 十雨

時を 差へ 如 聖代 子 萬民 共 鼓腹 擊

壤 文運 乃 風 不 極 開化 の 滋 養

沐浴 高枕 安臥 の 時 小 際 雲

圖 凡 西南 地方 亦 殺氣 の 妖 雲

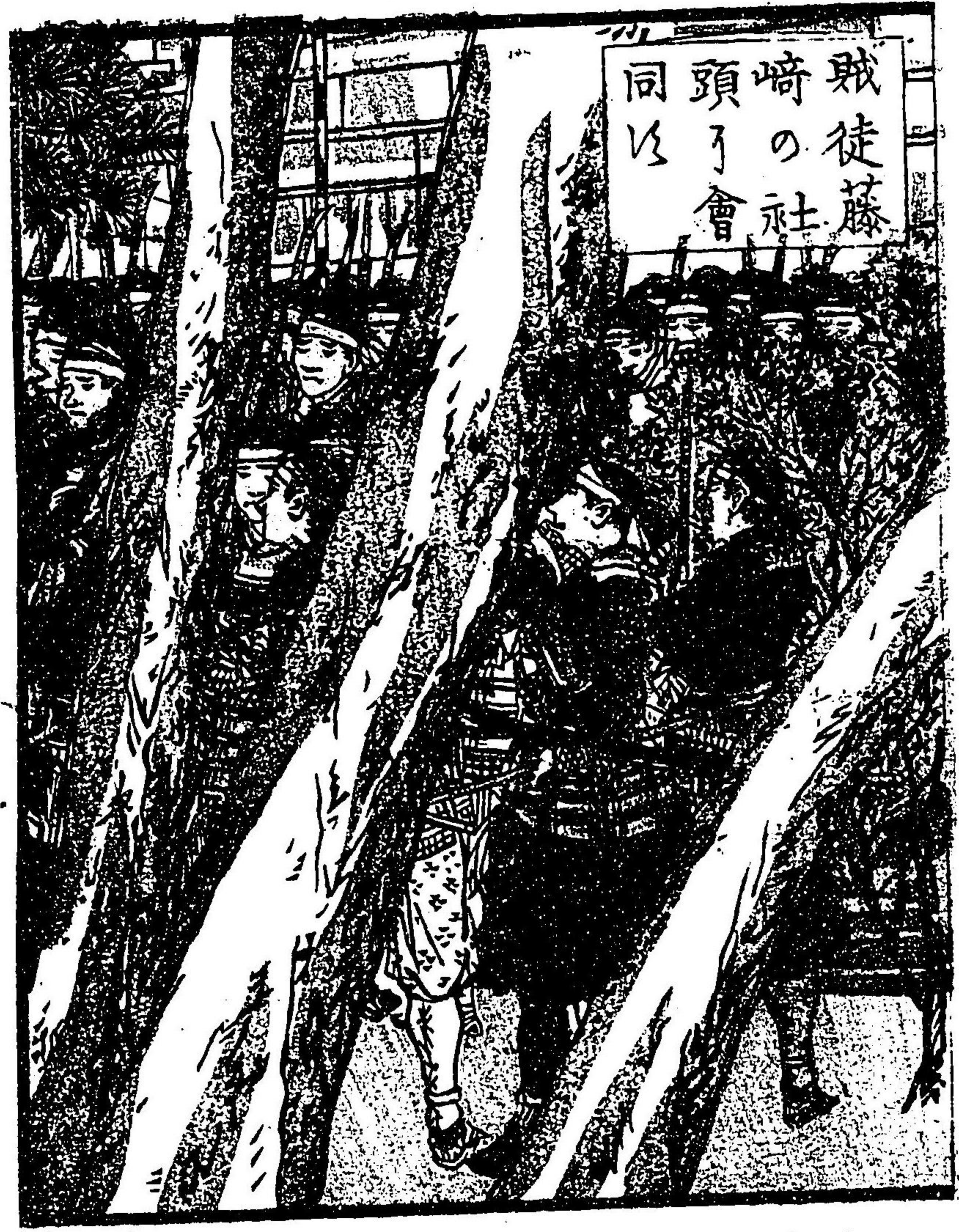
一線 乃 電報 云 千 五 音

夢の耳を驚愕せり開く徳年の
 暴賊山口は亂賊等が首も人身の
 大義を忘れ名分を拘り安小縣懸城
 懸以鎮基人私入一果の死者を山野小
 澤一汚名を朝野に流布せし事蹟を
 各社に新聞より格率し或は彼地
 より郵送の信書も参考集録し

以て春の厂が稿と題号す素より里
 茂市に迅速を責ぶるも小誤謬脱字も
 多かるるを以て看官幸おみなりと
 編者小代より題辭せしむるに

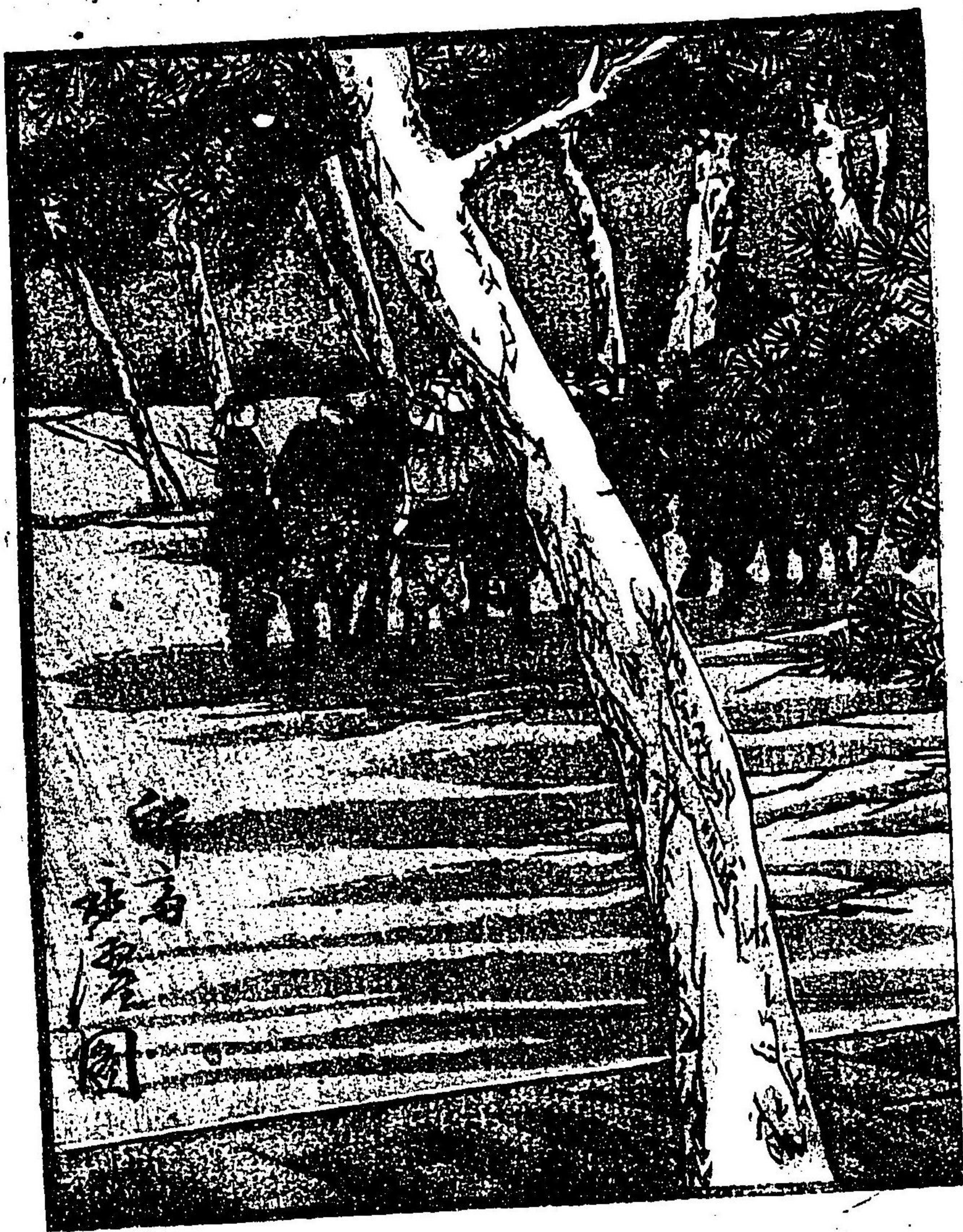
縁染園春懸誌





賊徒藤崎の社頭同以會





新編 源氏物語 卷之一

東京寄留

松村春輔編輯

源氏物語 卷之一

衣食足而行禮と故人の金言宜哉茲小肥後の國
 熊本の士族中あや神風連と稱ふ其の身日お
 増し窮迫はまより義理法律の道を忘せ終小私の
 為小暴を

朝廷小致し官軍の師を向え春降る雪とどろ俱

お死骨を朝野に瀑き、實は禽獸に非ざる野蠻ありと世人の渠が暴激を憎むといへば素これ皇國の人民あまが其罪の重きいりてくわあはれ、文化の光輝を認むる事と知らず、憊る大事を醸せ、哀れありたる無智無力去程に神風連の兇徒等、抗を窺ひ日を約し、熊本みその大社ある藤崎八幡の社頭を集合あり、當日の指揮分配を談合せしむる上野堅吾とらくる者進み出でつて陳るや

う夫を絆を起さんともさるあはまぐ其名を先し、て其實を後し、已む武威を輝し而して敵の氣を挫くこと古へより兵を用ゆる奥旨なり、秘訣をいへる乃ち之をあり抑遣の度の大舉と言は上ハ我神州の國是を維持し、て聖主の玉体を保護し奉り下ハ外夷を掃攘し、て萬民の安寧を謀らんとの大義も出ること、晴明たせば天神地祇も我旗の手ひたち玉ひて賊吏奸屬

を鑿殺し小せんハ素より疑ひあるべし尚鎮
臺縣廳の大逆を踏殺し普く四方の有志小告げ
其が忠憤を揺動せんぞ専務あつめと堂々と
て説き出さる満坐の兇徒等之も亦同意し即擧
文をあん認める其文を見せしむ
夫を鎮臺縣廳の設けらるや天朝を補翼し
万民を保全し専ら禦侮治安の任を盡さ可き
の処反而醜虜ハ阿順し固有の刀劍を禁諱し

陰ハ邪教の蔓延を徳源し既ハ神皇の國土
を彼ハ賣與し内地ハ雜居せしめんとするもの
ありぞ畏くも聖上と外國ハ遷幸あり奉
らんとはるの奸謀邪計顯然し真の大逆無道
神人共ハ怒る処の國賊たること更ハ辨をまこ
ざるあり依て我輩臣子の情義雌伏ハ忍びざる上ハ
國体不測の御危難を防護し奉り下ハ萬民
塗炭の苦患を解んため神勅を奉り諸邦の

同盟と義兵を興し悉く誅鋤せしめらるる
皇運挽回の基を啓らんとは嗚呼士農工商誰
り神皇覆載の鴻恩お浴せざる宜し四民有
志の葦神速城内お馳参ト皇国の御為忠誠
報効あるべきにあり

但し羈旅の官吏の文武を問はば巨魁と同
視し塵おまき外若し罪を悔悟し降伏致
し候とば時宜お應し承属お罷歸らしむる

とのあり

斯の如くお認め畢り然らば此檄文を騰写し
お縣下の士族等お觸廻せよ且つお討入りの
手配の第一の手は鎮臺の新營お火を放ち其の
勢にお本營を襲ひ再び新炮兩營お殺屠する
と荒増手配は物うら暴発の際おたり此
謀議俄お變りて兇徒等最初お新營炮臺お討入
り其の後お本營を襲ひつらとば諸鎮將縣令の

旅舎りやふハ夫とく小同志せうどうしを遣やり一人も餘あまさば討取うちと
るべし其後そのちち舊藩候きゅうはんこうの公子こうしを捕とりまゐらせ推お
して我黨わがとうの大將だいしやうと熊本くまもとの城しろを據より國中くにちうを号ごう
令しむを下くだし他邦有志たはうゆうしの应援おうえんと長州ちやうしうの
謀まうり置おく事ことその餘神風連しんぷんづなの使つかひを
結むすひしとあど後のちちよ季きく遊あそぶ事ことを
既すでに調しらひしとかバ此日このひハ各々家あかへり再またび廿
四日よっぴ月づきの黄昏ゆふぐより此社内このやないに集あはれり尚なほも謀議まうぎを
凝こを抗かりしと社前しやまへ間ま近く物音ものねしと人ひとのイむ容よう

体ていあるあぞ大野おほのハ疾はやく聞ききめ四隅しよくに眼まなこを配ばい
うハ豈計あはれらんや三名さんめいの巡查先じゆんさきの布ぬどより片陰かたかげ
あぐ茲こゝの密議ひそぎの一部始終いちぶしじうを側聞かたきこみせし体ていあり
が此時このとき遽あはて懼おそむとるさあめく走はり去いんとしとそ
けると加陽かやハ透とうと声こゑをわけ夫と並討なみうち首くびめよと
りあり速すみく十人餘じゆじんあまりの兇賊けうさくども羣集ぐんしゆり寄より
つ抜ぬく手ても見みせと無慘むざんや件くだんの三名さんめいを寸斷すんたん々々
切きりおき望のぞみ倒たし死骸しかいハ傍辺わうへんに撥遣はくせんり棄すて血劍ちゆうけん

鞘さや不納ふなむむど納なまりかぬ胸むねの裏目うらめと目めを見
合あせ兇徒等きょうとらの十口じゅうぐちの言葉ことばも無なき折おりも上野堅じんのけん
吾わハ取初とりよより腕うでを組くりて眼まなこを閉とぢ少時すくなくらく
思按しあんの躰たありしが徐ゆるうお組くり腕うでを解とき吃くと
一いつ座ざを見廻みましりて楮同類かみどうるいのいへるやう各おの位くさ左
のこ愕おどろく事ことハ恸あはれあるべし豫よてより拙せつ
者ものハ思おもひ儲たくわけたり然しかハあせどもおとひきや警けい
察さつ官吏くわんしの忍しのびしる想おもふお密議ひそぎの早はやくも漏もて

縣廳けんていより討手うりてを向むかふ斥候しやくこうの為ための警察けいさつあるん然しか
りある時ときハ兵書へいしょおりくる先さきんぢぢバ人ひとを制せいせ
と先哲せんてつの確言かくげん此時このときお當あたり兵へいハ神速しんそくを尊たぶらひ
兵法へいぽうの要かなめ空あかしく廿六日にじゅうろくにちの期限きげんを待まちて敵手てきお先さきを
駈かけらむんより今宵こんしやう這こ処こを討立うりたちて直ちちお鎮臺ちんたい
縣廳けんていを襲おそむん如何いかお此議このぎお組くせらむんやとい
ふ顔色かほいろ冷ひやましく思おもひ入いつたるありさあるま
座ざの兇徒等きょうとら之のを聞ききりて此この擬議ぎぎまづ

神風連市
中を横行
する図



仰せ尤も候あり然らば是より撃て出で平常の
鬱憤を散ぜんと口を揃へて答ふる中お加陽大
野の當社の詞掌内田某を招きつゝ事尔々と私
語くおぞ詞掌の疾くも心得直垂お探鳥帽
子をかむり神前ありち向ひる幣を把り鈴を鳴
し祝詞を唱へて退く時上野等の三人の神机の
前お進み近づき今月今日我輩の同士一百餘名
国家の爲め民の爲めお天お代りて逆賊を誅せ

お決まるとりくど大神尚我輩の忠義を憫
高天が原の神座より冥助を垂せ昭りお吉凶を
此一籤お示し玉へ謹上再拝声高らるるお唱へ終
りて頓て敬しく神籤管を取り下り身然とて
おまを振るお吉の文字現きしうバ賊徒の悦び
譬るお物ある借へ今宵の旗上げの神慮あり適
合しうや有難しと齊しく神前お願着き拜
伏し尚も冥助を祈りたり夫神明の非行の禮を

受けぬあんぞ國を乱し民を悩ます如此の兇賊
 を助け吉凶を示し玉ふの理りあらんやまこと
 已等が非義ふ事を辨へ知らぬ浅きありある自
 ら神軍を唱へ誇り神兵と稱すと其の愚昧ある
 小至てハ懸む物お堪ふりといをあくのこ憚り
 一程ふ今夜暴発の報告を得て寄り集まる暴徒
 の同志又前の日檄文お応じく遽りお賊軍お與
 せんとする元勤王黨の不平士族等追々お馳集

まゝ都合其勢百七十五名着到あり及びけし
 賊魁の三名ハあつて氣を得て諸方討入りの軍
 配をあげ先ツ二の丸并ふ櫻の馬場ある本營
 へ討入る者ハ

上野の堅吾 加陽 霽 堅
 大野の鉄平 方今改名シテ 大田黒伴雄ト云
 富永三郎
 右の四名を大将とす之を附屬する者ハ

能本一人
 且美之玉
 起北河
 能本一人
 且美之玉
 起北河

何本一人
 何本一人
 南海人
 何本一人
 何本一人
 南海人

松	友	河	深	太	古	若	加
尾	田	口	見	田	田	間	々
葦	栄	常	栄	三	十		見
邊	喜	喜	李	郎	郎	充	十
							郎
荒	澁	佐	牛	松	樹	兼	高
尾	谷	藤	鳥	田	下	松	水
	源	源	平	董	一	羣	惠
八	吾	太郎	七	藏	雄	喜	太
郎							

永	岩	上	吉	福	井	福	荒
山	吉	野	田	岡	伊	岡	尾
一	政	繼		善		應	延
馬	彦	緒	敬	熊	榮	彦	彦
田	古	兼	坂	立	梅	村	戸
代	田	松	本	川	本	田	田
儀	織	繁	宣		雄	鐵	次
五	象	彦	孝	運	太	雄	郎
郎							

鹿	小	野	春	春	横	大	阿
島	林	口	野	日	田	野	部
甕	恒	知		未	正		景
雄	郎	雄	又	彦	雄	昇	器

後	宗	木	飯	荒	猿	野	辻
藤	像	庭	田	尾	渡	口	橋
政		保	和	循		滿	美
彦	敬	久	平	直	晋	雄	直

十一

今	武	荒	富	星	齋	宮	吉
村	田	木	永	田	藤	本	永
栄	貫	敬	守	大		鶴	秀
太	次	吉	國	増	堅	喜	雄
郎	郎						

鬼	管	織	庄	高	猿	宮	筑
丸	武	田	野	島	渡	本	紫
幾	一			五	弘	篁	
曾	郎	壽	彦	郎	伸	齋	照
布							



警部村上
 九郎巡查一
 名と共に安
 留縣令の宅
 へ注進の図

森	荒	安	今	田	富	齋	藤
	尾	藤	村	代	永	藤	井
	保	善	健	儀	喜	求	三
美	夫	藏	次	太	雄	三	郎
			郎	郎		郎	
井	鶴	愛	有	寺	廣	緒	伊
上	田	敬	働	田	岡	方	波
次	伍	左		榮		小	織
郎	一	司	巖	助	齊	太	壽
	郎	馬				郎	

松井小左衛門	山田彦七郎	伴乙熊	同清四郎	妻木源兵衛	中根駿八郎	高田健太郎	佐藤繼
井上豊三郎	西川政太郎	同乙五郎	同源藏	小篠一名三	植野常茂	同五郎三郎	高田強太郎

兒玉忠次	辻橋喜一郎	福岡政右衛門	富永万記	長塚勝雄	南誠哉	井上平馬	岩越朴
米良龜雄	伊藤藤小楯	三谷任太郎	同助	近藤熊太郎	大石虎猛	大野吉太	同末雄

愛敬正元 宗村敬次
工藤政吾

右の外長坂千正岩下矢野森下島田後藤江藤有
働廣田有兄平川永井大河原狩野間部兄弟立野
父子等供て其數一百五十名ハ餘あまりける

第二章

再説種田陸軍少將が川向ふある新屋敷の旅館
へ赤根一雄を始はじめとす

高津運記 櫻井直茂

立島駿太 藤井才喜

平野寅雄 中垣景澄

森下照義

猶兒玉次等を供せ十名又高島中佐が新邸の旅館へ千場真鞆を始はじめとす

石原運次郎 林田鎌介

水野貞沼 澤春彦

廣岡子太郎

件の六名。與倉中佐の京町の旅館へハ齋藤熊四郎。古田孫市。掠梨武等三名。安岡縣令が山ざ

きの旅館へハ

吉村 一 沼沢 廣太

伊藤 健 猿渡 常雄

村島 五郎

の五名又太田黒田四等判事が三大區六小區の邸

へハ

浦 楯記 内田 三郎

高田 新太郎 平川 熊

山口 大藏

等が五名と決議し自由勝手の軍装おて得器

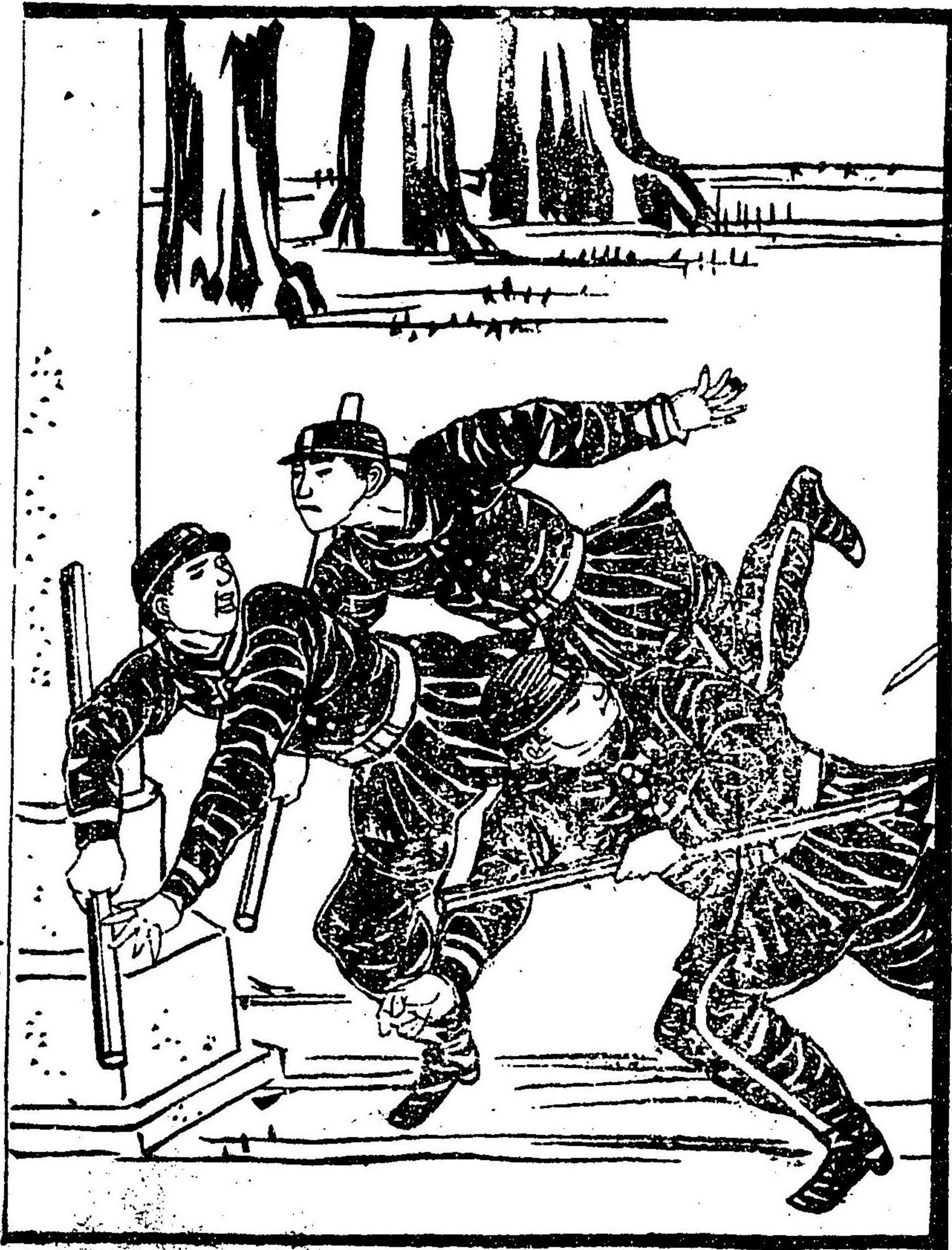
を提え持ち兼てありしを已せ等が身の守りと

て摸写したる三種の神益の御容形と一面の小

鏡を懐中あり焼飯の兵糧を腰に挟み準備速く

お整のひーりバ先出陣の祝ひあて暫時く盃を
打ち巡らー金峰山の炮烟を暗号お諸方一度お
殺入るべーとの約を堅め社頭の廣庭お隊伍を
整列ー卒押出さんとする折ーも遠お賊魁の三
名声を励まー誰りある血祭の者を出ぶせよい
ふ言葉お应ーて忽ち二三の賊の若者走菟つて
愛敬左司馬が両手を捉え神階の本お押据える
お這ハ狼藉と驚き騒ぐ左司馬が細首討落ー頓

て神前お之を供備へ門出よーと動揺笑ひ其
口々へと馳向ふ時や十一時の鐘の音も遙り
お听えそ月暗く闇さ己お身果を知らぬ愚
昧の哀しきゆみ茲お縣令安岡良亮ハ其性精廉
忠直おー亦博識の聞え高き政事家お此ハ今
尚縣下の士族等が黨派を分ち互お相軋るの勢
ひを現ハー中おも神風連の輩ハ封建の往古を
慕ハ維新の皇化を悦びそ時とーてハ縣廳の布



十七



藤崎の社
内めぐり
徒ら
査を追
掛る
る
ひ

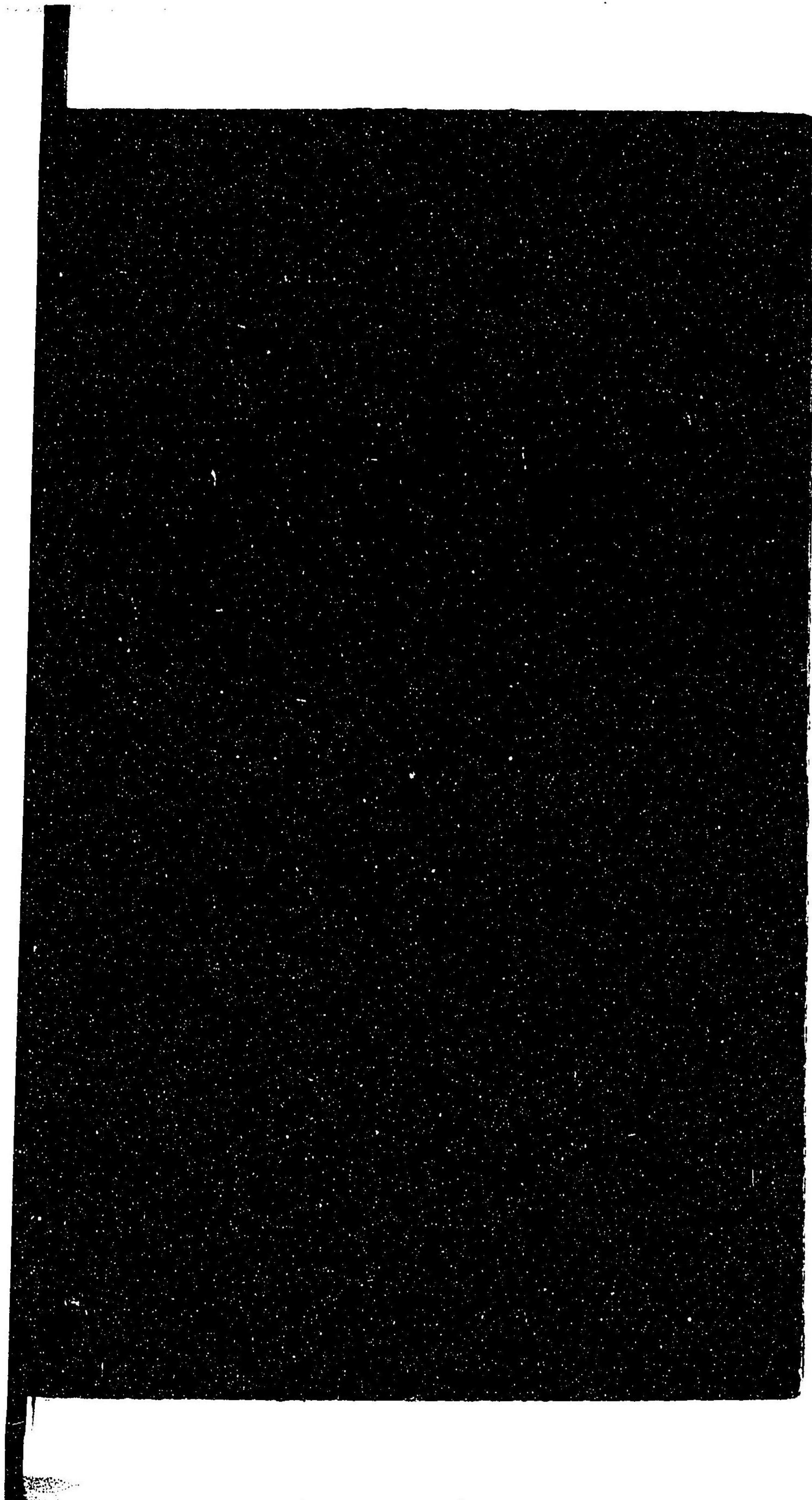
告を蔑視し、こゝにお進みと度重なるみと現今の
世が、うゝ日せ追ひ至らば、将来をいつて思ひ遣は
せ始終の皇國の御爲に宜しき事のあらべうら
ば如何あれし、此輩を廣く開明の世に教導さ
せんと先その端緒を考へ、時かありてハ説諭
を加え、又ある時ハ学校新聞其他種々の教育を
施行し、奨勸おわうら、あらざるを渠等の及つて
之を厭ひあらざるか、あると思ふのさうか、今の倍

我意を慕りて、稍縣官におも敵とくべき夫振表お
見え、おむ、良亮縣令おむを憂ひて、此事おけ、
心を痛め、今宵の十月廿四日、獨り燈下にお坐し、種々
思慮を運らるを、折しも大属仁尾惟茂ハ、遠く
く入来りて、縣令おむを未だ知らし、召せざるや豫て
申あげたる如く、此程より縣下の士族等忍び、
お集合あせ、何故あり、心とあくありて、竊
お注意けし、今宵お至りて、其景況既お顯せ、切

迫せり仰ぎ願くは這の事件発らざる先小彼等
を捕縛し事愠やうお計ふべきやと言葉の終ら
ぬ処へ此縣下の士族めて猛勇の聞えある六等
警部村上新九郎ハ巡查坂口静樹を伴ひつ事
ありと云ひあがら追ふべく蒸し襖を押し開
き席を附りぞ太息を吐て諸を事あぞ及び
と僕り弟めて候との何のゆどうあう神風連の
中お加えらるるを僕夢ある知らざりしが昨令

の起居行動ひいのみ怪しく認めりハ引つ捉
へて詰問せしお渠遂お陳せる事を得て明後廿
六日の夜神風連の同志一百餘名縣廳鎮臺を襲
せんとの謀議既お決意せしとの顛末を逐一白
状お及びひり此の上ハ時間を移さば鎮營を喋
し合しを僕等罷り向ひ一々捕縛ひらさんや賢
慮いりどと差扣ゆらハ縣令ハ仁尾村上が符節
と合せし再度の報お愕らるる事おありの家

らん其ハあき意外の大事あり然らば先づ小関
 参事兼原七等出仕の兩名を招きよせんまゝ心
 利する巡查をえんひ藤崎へ遣ひ彼等がさま
 を窺ひ来きせん疾きよかしくと令せり又三通
 の羽檄を認め夫々一人を飛し物き音も意外
 の事小出るせり夜深お引き差を門の戸も鎖ぬ
 御代よりしとらふ悪き心の禍津人暴動うかしの狂業ハ如
 何ぞ神慮おかるふ念ふ心の根を浅間しむ
 春通一可
 補巻之終



特40

623

大日本書局發行

函架號冊

091286-001-2

特40-623

春廼雁可祢

松村 春輔/編

M10

DBN-2159



漢朝

春風集

補

上

不詳

特40

623

